

ネパール住民林業のその後

渡 辺 桂

1977 年末から 1980 年 8 月までネパールで、「住民林業プロジェクト」の設計と開始に携わったことは、いろいろな機会に述べたことがあり、またそのあらましを紹介したことがあるのでお読みになった方もあるかと思う。その後、「ネパールではこうだった。」「ネパールではああだった。」と繰り返したので「ネパキチ」と呼ばれるほどになった割にはネパールを再訪するチャンスに恵まれなかった。

今年の 2 月 JICA の「ネパール農村社会基礎調査」が実施され、久しぶりでこの国を訪れることが出来、「住民林業プロジェクト」のかつての関係者にも会い、その後の様子も聞くことができたので、感想を述べさせていただきます。

ただし、4 月からケニアに赴任して現在「社会林業—育苗訓練プロジェクト」の初期の仕事に従事なので、こまかな資料は手元になく若干印象記めいたものになるかも知れない。その点はあらかじめお断りしておきたい。

1. 住民林業プロジェクトの基本方針

住民林業プロジェクトの設計に当たったときに、これだけはプロジェクトの柱にしなければならないと考えたことがいくつかあった。

そのひとつは、ネパール山間部の住民のポテンシャルを最大限に生かすために、彼らのフェルト・ニーズ（肌身で感じている欲求）を基礎にして植林計画を作り、それを積み上げて行くことであった。住民の欲求とは、先ず果樹を少数家のまわりに、家畜の飼料になる木を耕地周辺に、薪炭林を集落の周囲に、そしてさらにそれを囲んで用材林という具合に集約された（チューネンの「孤立国」を連想したことを憶えている）。もちろんその他の生活上の欲求がないわけではなく、食糧不足などはその最たるものであったが、住民に「現在問題になっていることを 5 つあげてくれ」というと飲料水、家畜の餌、薪の 3 つは必ずその中に入る状態であったので、これを基礎にして植林計画を村落レベルから作り上げることにしていた。

もうひとつは、ネパール山間部の村落共同体の強い絆である。3,000 人から 5,000 人を単位とするパンチャヤット（村）は人工的な政治・行政のための区分であって、社会・経済単位としての村落はもっと小さい。大体 100 家族ぐらいが強固に結びついた村落共同体を形成している。この中であれば誰もが誰もを知っており、共同の利益の

WATANABE, Katsura: Nepal Community Forestry—A Visit after Five Years
ケニア林業育苗訓練プロジェクト，チーフアドバイザー

ために協力することも容易になる。植林計画を進めるにはこの単位ごとに住民の総意をまとめて行くことを基本としていた。

さらにもうひとつは、ネパール林政では画期的といえる「住民林業政策(1978年)」を山間部の営林署に徹底させ、上に述べたような植林計画に対する援助を強化することであった。これがそう簡単でないことが、なかなか日本の人には分って貰えないのだが、たとえばこういうことがあった。山間部を巡回していて営林署へ着いてみると週日なのに閉まっている。営林署長を自宅に呼びに行かせて「なぜ休んでいるのか」と聞くと、「今日は友好国の元首(その時はユーゴスラビアのチトーだった)が亡くなったので臨時休日だ。ラジオで聞いた」という。「ところで3か月前に新林業政策(パンチャヤット林及び同保護林規程)ができていて、その文書が届いている筈だが、読んでいるか」「それは知らなかった」という答が返ってくる。また、その後プロジェクトが開始されてからも経験したことだが、植林適期に予算が届かずにも、森林局に要請を上げて来ない。「上位官庁あるいは上級者に何かを要求するなどというのは恐れ多くてできない」という気風があるのである。これはネパールに限らず開発途上国では未だに根強い傾向であって、かつては日本もこうであったと聞いている。しかし、これをそのままにしておいては住民林業の振興はおぼつかないし、現場の状況が把握できない。このためにとった方策が、各国からのボランティアを現場に配置して営林署長や新しく任命された住民林業要員を補佐するという仕組みであった。彼ら(ボランティア)に期待したのは、新政策の普及、住民の総意をまとめて村落レベルから植林計画を積み上げるというプロジェクトの運営を徹底させるほかに、ちょっといいにくいことだが内部牽制の意味もあった。予算が村落レベルまで正確に届いているかどうかの事業を通じての監視である。

さて、まあおきが長くなったが、今回ネパールを訪れて感じたのはプロジェクト初期の精神が薄れてきているのではないかということであった。プロジェクトの陣容も揃い、事業量もふえてはきている。しかし、現在の関係者と話してみると事業量を消化するのが最大の関心事で、住民の意欲をどう受けとめそれに答えるかという姿勢が薄いのを残念に思った。どのような組織でもその人員構成が永続することは考えられない。初期一緒に働いたカウンターパートのネパール人フォレスターも1人はFAOの専門家になり、他の2人は新しいプロジェクトの責任者に、その他の人々も違うポストにそれぞれ栄進していた。

私の後任でFAO本部から派遣されたエグベルト・ベリンク(現在オランダへ帰国、同国外務省国際協力局に勤務)の在任中は、初期の精神をよく生かすとともに、仕事の質も向上しつつあった。世銀・FAO・ネパール政府の合同評価でもプロジェクトの成果が高く評価され、20年計画の第1期(5か年間)として始められたプロジェクトの第2期への継続が勧告されていた。なかでもプロジェクトの現場でのボランティアの活動は称賛されていたが、彼等の活動を支えるプロジェクトからの支援の継続と強化もリコメンドされていた。今回懸念を抱かされたのは、このボランティアに対するプロジェクトの支援に弱体化の影が見られたことである。

当初プロジェクトでは山間部 7 か所の拠点に 2 名 1 組のボランティアを駐在させることにしていた。ボランティアは概ね大学卒すぐか、あるいは実務経験があっても 2 ～ 3 年程度の青年である。そして自然環境も文化・伝統もまったく異なる土地で働くことになる訳だから、2 人まとめておけば病気や怪我などによる孤立化や精神衛生上の危険を大巾に減らすことができるほか、技術面での支援の消化も容易になることを期待してとった方策であった。現在はこれが 1 か所 1 人になっていた。理由は事業に参加するパンチャヤットの数が多くなったことが挙げられたが、果してこれで問題はないのだろうか。ボランティアたちはアメリカ、イギリス、オランダそして日本の青年海外協力隊員も参加している。藤原達久、田中隆行、牧野達也、寺川幸士、野田直人らの諸氏が、1980 年以降送り出されてこのプロジェクトで働いてきた。もっとも最近帰国された寺川・野田の両氏から聞いた話でも、ペリンクが 1984 年夏に帰国してからプロジェクト現場に対するサポートがぐっと少なくなり、現場からの要請も「梨のつぶて」になったという点が気になっていたのも、これもカトマンズにいるプロジェクト担当者にあずねてみた。「ペリンク氏のあとなかなか後任がきまらずにいたのと、業務量が増えてきているので対応しきれない」という答えだった。

プロジェクトの初期にボランティアを現地に送り出す前に指示した事項の中でもっとも力点をおいたのは、「外国人の興味で仕事をするな。必ずネパール人スタッフあるいは村民と共に働け。何事も村民の総意で、どこにどういう樹種を、どう植えるかも彼らに決めさせよ。技術的な、あるいはもろもろのアドバイスを求められた時に初めて助言せよ。その結果、失敗があっても、それは村民にとっても貴重な学習過程であって将来に生きてくる。こういう方法で実施しなければ、このプロジェクトは終わった途端に消えてなくなる」ということであった。当時のボランティアたちはこれを良く理解し、共感を持って働いてくれた。現在プロジェクトで働いているボランティアたちは、いったいどんな気持ちで、またどんな問題を抱えながら現場で仕事をしているのだろうか。それぞれの現場を訪ねて彼らと話し合ってみたいと痛切に感じたが、今回の調査の日程の中ではとても不可能なことであった。

2. 林業関係援助

住民林業プロジェクト開始当時、林業関連のプロジェクトの数は 10 あった。その内訳は、地域開発プロジェクトと林業プロパーに分けると前者が 8 つ（世銀—2、アメリカ—2、イギリス—1、スイス・ドイツ協同—1、スイス単独—1、カナダ—1）、後者が 2 つ（イギリス—林業研究、アジア開銀—林業開発）であった。今回行ってみたら、これにフィンランド、ノルウェーのプロジェクトが加わっていた。

住民林業開始当時でもプロジェクトの数が多すぎるという人がいた。しかし、あとである USAID のレポートがいったように「住民林業 (Community Forestry) が各プロジェクトの公分母 (common denominator)」になっていて、プロジェクト間の連絡は緊密だった。たとえば営林署長に集まって貰ってセミナーを開くとか、彼らを研修旅行に出すとかするときにも、各プロジェクトに連絡して合同でやることがあ

った。外国人専門家もセミナーに加わって真剣に討論したりした。お互いがどうい
ことをやろうとしているかも、よく知りあっていた。この雰囲気も、今回は大分変っ
て来たように見受けられた。

今回の調査団の訪問予定地は2か所あり、当初はカトマンズ北方のシヴァプリ流域
と、テライ平野（正確にはインナー・テライで、尾根1つ越えた平野部）のチトワン
国立公園周辺を予定していた。ところが、訪問1か月前に、シヴァプリ地域はFAO
とNORAD（ノルウェー開発庁）の共同プロジェクトが開始されたので、その代り
にカトマンズ南部の山地に調査地を変更してくれとの申し入れがネパール側からな
された。調査団はそれではやむを得ないということで予定を変更し、まずチトワン周
辺の調査を済ませた。新たに指定されたゴダワリ地区に調査に入る前に、念のため
と周辺プロジェクトの事業地域を関係者にきいて確認してみた。すると、何とこの
ゴダワリ地区はすでにアジア開銀とFINNIDA（フィンランド開発庁）のプロジェクト
事業地に入っていることが判明した。こんなことは以前だったら起り得ない事柄であ
ると思う。

以前は月に1～2回各プロジェクトの専門家とカウンターパートが、他のプロジェ
クトの専門家とカウンターパートを招待して、お茶を飲み、ビスケットぐらいかじり
ながらそのプロジェクトの紹介を聞き、ついでに雑談もする習慣があった。ずいぶん
フランクな議論もできたし、そういうところからお互いに親しみも湧き、円滑な協
力関係も生まれてきていた。今回の経験は、どうも援助プロジェクトの数は増えたが
お互いが好き勝手な方向に動いていて、連絡・協力がうまくいっていないのではない
かという危惧を抱かせた。

「援助を調整して国家目標に集中し、開発努力をもっとも効果あるものにするの
が、被援助国の義務であり、権利である。」という尤もな意見がある。この意見は援
助国側からも開発途上国側からも聞かれる。しかし、タテマエと現実とは往々にして大
きく違いが違ふ。援助国の主体をなす欧米諸国の文化は権利義務を明確にし論理性を貴
ぶハードな文化である。それに対して「ノー」ということを嫌うソフトな文化が開発
途上国には一般的であるように思う。この議論はもっと精密に展開する必要があるの
だが、今ここでいいたいのは、やはり援助国側がもう少し「思いやり」を持つ必要があ
るのではないかということである。援助のプロジェクトを組み立てるときも、いろい
ろな可能性を考え、カウンターパートと一緒にじっくりと検討し、何回も念を押し、
相手の意見をひき出し、それを何度もくり返して初めて途上国の実態に即したプロジ
ェクトの設計が可能になってくる。現在の援助国側のやり方はまだこれには遠いのが
一般的であるようだ。我が国の文化はソフトな方だと思ひ、「思いやり」が大きな
美点として数えられる精神的風土もあるので、これを援助に生かせばユニークでかつ
実効のあがる国際協力ができるはずだが、ややもすると欧米諸国流の協力と同化して
しまう危険性は常に存在する。

これに関連し最近面白い話を聞き勉強になった。「施設の建設にはどうしても出
来・不出来がある。しかし、なぜ出来・不出来があるかということを調べてみると、

それは建設会社の規模とか会社自体の経験とかには殆ど関係がなく、現場責任者の熱意、親切気があるか、ないかによって生じてくる。」というのである。「建築などというものはもう少しスマートに運んでいるのかと思ったら、それでは全く技術協力のプロジェクトと同じですね。」という感想を洩らしたのだが、開発途上国とする仕事はやはりこの「親切気」というものが最初になければならないだろう。

話は横にそれたが、ネパールにおける林業関係援助が増えたのは大いに結構なことである。ネパール山間農村の状況に照らせば、それでもまだ足りないかも知れない。これに、援助する側の「親切気」が加わってくれば、もっとその協力が生きてくるだろうと感じられた。

3. ネパールの人情

私は1980年にネパールから帰国して、その後何度か「何故ネパールがそんなに良いんですか」という質問を受けた。その時にはたいいていこう答えたと思う。「ネパールを女性にたとえれば、美人で、気だてが良くて、ちょっとだらしが無い」美人とは、あのヒマラヤの山々を初めとする自然の美しさ（もちろん実際の美人も多いが）であり、気だての良さとはそこに住む人の気持ちの温かさである。ちょっとだらしが無いというのは、この前の方でもう実例をあげた。

とにかく、こういう女性がいたら男たるもの「よし、俺がひとつ面倒をみてやりたい」という気分にならないだろうか。古いとか、何とか言われるだろうが、これが私にとっては正直な気持ちである。

この中の気だての良さ、つまりネパールの人の気持ちの温かさを今回の訪問でも再確認した。

私が在住した当時森林局長だったS氏は、枢密院書記官長になっていた。「お陰で余計に腹が出てしまった」と笑う氏とは、一緒に出張したり、深夜まで酒を呑んで馬鹿話をしたりしたことがたびたびあった。今回もカトマンズで泊った晩はそれほど多くなかったのに、それでも数次に亘って拉致されて一緒に呑んだ。この人と会っていると話が全く湿っぽくならない。今度暫くぶりで来て感想はどうだというので、私が卒直に「どうも少しタルンできているようだ」というと、「うん、まあタネは播いてあるから芽は出るさ」という調子である。ネパールの楽観論というのがあり、かつて山間部で調査をしたときに、村の長老に「あなたの子供の時周囲の山々（そのときは既に全くの禿山だった）はどうだったか。結婚した時には、孫ができた時にはどうだったか」と聞いて、「子供のときにはうっそうとした森林があった。結婚した頃もまだかなりの森林だった。孫が生まれた頃から今まで10年ぐらいのうちにすっかりなくなった」というような答えをきいて状況把握をする。そして「このままで行ったら大変だが、今後どうしたら良いと思うか」と聞くと、「そのうちに神様が一晚でもとどおりに木を生やしてくれる」という答えが返ってきて驚いたことがある。ここまで行くと行き過ぎ有害だが、ネパールの山村を歩いて、人々が貧しいながら明るい表情をしているのは、一般に物ごとにくよくよししない楽天的な気質のせいだと思う。S氏

はこの典型的人物である。そしてもちろん憂鬱な人をみるよりは明るい人を見る方が楽しい。私が近くケニアへ赴任する予定だというと、その時は真面目な顔で「何故、ネパールへ来ないのか」と訊いた。「ネパールはまだその時期でないし、私はいまフィールドへ出たいんだ」というと、それにはただ「うん」といった。

私が家族と住んでいたカトマンズの小さな家は、JICA の新しいネパール事務所からすぐの所にある……筈であった。ところが、屋上に上ってみても見当らない。歩いて行ってみたら見つかった。上からは見えないのも道理で、周囲の水田だった所に新しい大きな住宅が建ってしまっている。そして私の我が家は海外青年協力隊員が伝染病にかかった時の隔離病棟になっていた。そういえば、我が家でも当時9才だった息子が赤痢にかかり自宅療養をしたことがあったので、その頃から因縁があったのかも知れない。それにしても、その地区の建築ラッシュには若干驚いた。その頃の隣人たちは、ネパール人のおじさん、おばさんたちが出てきて、家内や息子の消息を尋ねる。月日が一瞬短くなって、当時の話をした。

森林局の次長になっているB君は、1977年末に私が初めてFAOから調査に訪れたとき、一緒に1か月に亘って山間部を歩いた仲間である。彼の4人の子供の名前も全部覚えていたが、彼の家へ招かれた夜三男を長男と見違えた。5年半経っていたのだ。一番下の女の子のカンティがすっかりレディになっていた。親爺さんのB君の方は一向に変らず、野人ぶりを前の儘に発揮していた。

他のプロジェクトのネパール側リーダーになっているC君は、もとどおり手強い仕事をしているようだった。都合が悪くて最初連絡がとれなかったのでホテルで短い話をしただけだったが、奥さんと一緒に空港まで会いに来てくれた。

4. あとがき

人間年をとると誰しも懐古趣味におちいるのは避けられないのかも知れない。それと過去のことはどちらかという美化される傾向がある。更に、これまた人間には自惚れがあって、自分の初めたプロジェクトは誰も自分よりうまく運営できるはずがないように感じる傾向もあるだろう。これらを割りきすれば、ネパールの住民林業はやはり着実にその事業を伸展させているといって良いのだろう。ひとつ自戒も含めて書いておきたいことは、私はネパールでは余りに「全力投球」をし過ぎたかも知れないということである。住民のニーズを汲んでそれを事業に反映させるという方針はここケニアでも守りたいと考えているが、プロジェクトを組立てる手法は、ネパールの住民林業プロジェクトよりももっと余裕をみていった方が良くと昨今考えている。来年11月まで与えられた期間で、それまでにケニアの「社会林業・苗圃訓練プロジェクト」もメイン・フェーズ（5年間）が始まるようにすっかり装備を整えていなければならない。ここでもカウンターパートに恵まれて我がチーム（柳原・堀内専門家と私）の仕事も大いにやり甲斐のあるものとなっている。後日、これは感想でなくしっかりとご報告したいと思っている。